

---

# 白兎の憂鬱

JEIKJEIL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白兔の憂鬱

### 【Nコード】

N3605D

### 【作者名】

JEIKJEIL

### 【あらすじ】

満月の空      竹藪の中      莫蔭でもひいて      月見団子でも食べ  
ている      そんな白兔のちょっとした日常のお話

## 1．九月の十三夜　いつも隣には

1

「ヒナタ。ねえ、ヒナタ。」

私を呼ぶ声をする。今日はあんまり起きたくないんだけどな、

「ヒーナーター、ちゃんと巢で寝ないと風邪ひくし、襲われるよお」  
全く、だれに襲われるというのだ、この御時世に。それに、今は暖かいんだから風邪引くこともないし、

「ヒナタが起きてくれない・・・もしかして、ヒナタ、風邪で死んじゃった？ねえ、ヒナタ、ヒナタ！！」

「勝手に妄想膨らませるんじゃないよ。触ってれば生きてるくらいは分かるでしょうに。」

「ええ〜ヒナタはいつも冷たいじゃない。」

「それは態度の問題。あと、私が冷たいのはヨウに対してだけで、他の兎には冷たくしてませんから。」

私の名前はさつきからこいつが呼んでるように、日向。と言う。

ちなみにこの妄想癖ちびうさが「陽」である。

「で、今日は何なの？」

このちびがやってくる日は決まってロクなことが起きない。きっと今日もロクでもないことが起きるんだろう。

「あのね、あのね。変な動物見たの。」

「変な動物？」

「そう、あんまりおつきくはないんだけど、後ろ足だけで歩いて、前足はバランスを取るために使ってる感じだったの」

私はため息をつく

「私たちだって、後ろ足だけで跳んで、前足はバランスじゃない。」

「違うの。だってそいつら、地面から木みたいに真っ直ぐになって歩いてたんだよ。」

・・・本当にロクでもない。

「・・・まさか・・・ニンゲン？」  
いままでで一番ロクでもない話だった。

2

「ほら、こつちこつち」

「ちよつと、待ちなさい 陽。」

ちびに連れられて私は森の外れにやってきた。

「ねえ、今日もあのうさぎさん、いるのかな？」

「どうだろうね。早く行こう。」

そんな会話が耳に入る。間違いなく、ニンゲン。

「陽、聞いて。アレはすごく悪い生き物なの。木という木を切り倒して、自分達しか住めない縄張りを広げて、私達兎を連れ去ることだつてあるんだから。」

私がこれだけ真剣にしゃべってもこのちびときたら

「そんなことないよ。楽しいよ、あれといると。」

と全く分かっていないのだから

「だから、だまされてるのよ。油断させといて、連れ去るの。」

なんて言つたところで目の前にはもうちびは居なかった

向こうを見ればニンゲンと戯れてる。

「ヒナタもおいでよぉ」

「知らない。私は行かないからね。」

私はそのまま森に帰ってしまった。

まあ、なんだかんだ言つて昔よりは静かになったニンゲン達をそれほど警戒しては居なかった。

だから そのときは予想でしかなかったのだ。

陽がその日を境に帰つてこなくなるなんて・・・。

3

日向は焦っていた

陽が帰つてこない

もう、三日も経つの・・・

「・・・やっぱり、ニンゲンが・・・？」

そして日向は森の外をにらみつける

「ニンゲンが・・・また、私から・・・大切な兔を・・・奪うとい  
うの・・・？」

日向の真紅の瞳から一筋の涙がこぼれた

そして

「・・・許さない」

「・・・絶対に許さないんだから・・・！」

森の外へと飛び出す日向

「陽・・・陽・・・陽陽陽陽陽！！！」

弟のような存在だった兔の名を呼びながら  
その瞳を怒りに燃やし

日向は走った

止める者など何も居ない

彼らのニンゲンに対する想いは一つだから

でも誰も同調はしない

みんなニンゲンの恐ろしさを知っているから

日向は独り走る

4

えと、ここはどこだろう？

たしかヒナタがニンゲンっていったのとあそんで、

きがつくとずいぶん森から離れてて

で、帰ろうとしたときに

なにか「すごく速いモノ」にぶつかったんだっけか  
全身がすごく痛い

あんまり痛いから目が覚めてしまった

「えと、ここはどこだろう?」

見知らぬ場所だった

僕が決してみたことのない、絶対に森にはあり得ない光景

「あ、起きたみたいだ。」

「よかった。生きてたんだね」

ニンゲンが僕に心配そうな視線を送っている

僕はまだ体中が痛かったけど、なんだかちょっと元気になった気がした。

次の日からニンゲン達は僕にごはんをくれたり、一緒に遊んだりそのうちにニンゲンの言葉もちよつとはわかるようになってきた今見てるニンゲンが入ってる箱は「てれび」でそれと線でつながってるきかいが「げーむ」

で、おっきいニンゲンが「おにいちゃん」でちっちゃいニンゲンが「ひな」

しばらくはヒナタと聞き間違えてびっくりしてたけど、慣れた慣れてしまつくらい長くここにいた。

5

この「おへや」と「おそと」をわけている「まど」から太陽の光が振ってる。

そういえば僕の名前は陽。太陽の陽。降り注ぐ光

で、彼女の名前は日向。太陽が作るまどろみの空間

「そういえば、ヒナタは今頃どうしてるんだろ」

長いこと怪我をしてて忘れてた。もしかして、ヒナタは僕がニンゲンにさらわれたと思ってるんじゃないだろうか。

「あれから、どれくらいたったっけか・・・」

数え始める

あの頃は蝉が鳴き始めた頃で・・・今は鈴虫とかが元気だから・・・  
「・・・3ヶ月・・・？」

1年の半分の半分。こんなに長く森の外にいたのは初めてだと思う。  
「・・・ヒナタ、心配してるかな・・・？」

ふと、ヒナタが恋しくなった・・・

6

もういくつも寝たら十五夜ね・・・。

陽を探してニンゲンのマチに潜伏すること三ヶ月  
未だに足がかりさえ掴めない。

十五夜の私の席に隣に陽が居ない。それを考えるだけでぞっとした。  
「・・・本当に・・・どこにいったのよ・・・まさか、もう・・・」

ニンゲンは兎を火あぶりにして食べるって聞いたことがあった  
それを思い出して、私の中で嫌な予感が駆けめぐる

「・・・だめだめ。あきらめちゃ・・・」

気合いを入れ直す。そうだ、まだ望みを失った訳じゃない

「もう一回、森の近くから、探し直してみよう・・・」

そう決意した私の前から強い光が降り注ぐ

あまりのまぶしさに目をつむった私の目の前

けたたましい音を鳴らしながらその光源が猛スピードで迫ってくる

そして

私はそのすごく速いモノにぶつかって

すごく痛くて

気を失ったのだった

7

ひなちゃん達には悪いけど、

僕はあの「おうち」を抜け出していた。

耳を澄ます

僕に怪我をさせた「くるま」の音が響く  
あれにあたると本当に痛い。

実際、ひなちゃん達がいなかったら、僕は、死んでいたかもしれない。  
い。

だから不安になった。

「・・・ヒナタ・・・。」

キキーツ

今の音は・・・

確か・・・「くるま」が僕に当たったときと

同じ音

僕は

走る

8

空と地面が何度も入れ替わって

私は体中から真っ赤な血を吹きながら転がっていた

私の目の前には二本足で立つ不快なシルエット

ニンゲン・・・

万事休すってやつかしら？

そんなことも考えながら、私の意識は混濁していく。

「・・・ヒナタああああ！！！」

変だな・・・陽の声が聞こえる・・・

でも、無事で

よかった

a f t e r . . .



結局その年の十五夜は、ヒナタとは一緒に過ごせなかった。

この森にヒナタはいないけれど

僕はもう子供じゃないから

もうヒナタがいなくても大丈夫。

大丈夫

・・・て何勝手に人聞きの悪いシメ方してるのよ、あんたは!!」

僕の後ろから白兔がどついてきた

「え、ヒ、ヒナタ!? 帰ってきたの!？」

僕は驚いて振り向く

「ええ、傷が治ったからね、「おにいちゃん」と「ひな」の「おとうさん」と「おかあさん」が返してくれたわ」

「そうなんだ・・・よかったね。」

僕は心底ホツとした

「あんまり良くない。「おにいちゃん」と「ひな」は泣き始めるし、しまいにや「おとうさん」の「くるま」に乘せられて、

危うく胃の中身全部吐くところだったわ。」

そしてヒナタは遠い目をして言った。

「でもまあ、ニンゲンも、悪くないモンね。」

「ヒナタ? 何か言った？」

ヒナタは赤くなってそっぽを向いた

「な、何も言ってないわよ。でも・・・」

「でも？」

「たまには、会いに行つてあげた方がいいかなあ? あのニンゲン達に・・・」

すごい。ヒナタ、白兔なのに真っ赤っ赤。

「くすすっ」

「何がおかしいのよ、陽。」

「いや、だってヒナタ真っ赤なんだもん。それに・・・」  
「それに？」

「こっちから会いに行く必要はなさそうだよ？」  
そう言つて僕は森の外の方を指し示す。

「うさぎさーん？いないのぉー？」

間違ひようもない「ひな」ちゃんの声だった。

「行かないの？ヒナタ。」

「ちよつと待つてよ。行くわよ、行くから。」

そして、また森は平和になつたのでした。

## 1・ 九月の十三夜 いつも隣には（後書き）

短編連作にしたいと思ってたのに2で終わっちゃうというダメダメ作品です。

童話と銘打ちながら漢字が難しかったり内容が重かったりするので小学校高学年かその親御さんに読んでいただけたらなーと思っています。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

## 2・十月の二十三夜 雨のち曇りの大冒険！？

0

・・・あの事件からもう1ヶ月が経とうとしていた  
私もこの1ヶ月はすごく平和だった

「ヒナタ」

私を呼ぶ声がある

また ロクでもないことが 始まりそうだ

嘆息 まあ 嫌いじゃないんだけどね

1

「ヒナタ」

私を呼ぶ声がある。

まだ、寝ていたいのだが・・・。

「ヒイナアアアア」

彼はそれを許してくれそうにない

「まったく、何なのよ。こんな朝早くから。」

顔を出してやる。

「ねえ、ヒナタ。昨日すごい大雨が降ったじゃない？」

「ああそういえば振ったような振らなかったような・・・。」

「でね、でね、そのとき崩れた土砂の中に、トンネルみたいのがあったの。」

いやな予感がよぎる

「それで、ヒナタも一緒に行こうって。」

「嫌、一人で行きなさい」

「だって、一人だと怖いんだもん・・・。」

陽がうつむく。まあ、前回のこともあるから一人で行かすことはできないのだが・・・。

「どうしてもいきたいの？陽」

「どーしてもだよ。」

再び嘆息　まあ、いいか

「しょうがないわねえ、行つてあげるわよ。」

2

「ヒナタ〜こつちこつち。」

「ちよつと待ちなさいよ、あんた速過ぎ！」

まだ、雨がしとしとと降り続いている中、私たちは竹やぶの奥のほうに来ていた。

「ほら、ここ。ここ。」

陽が指し示したところは確かに土砂が崩れその中から洞穴のようなものが出ていた。

「くだらない。きつと防空壕か何かよ。」

「ヒナタ〜早く〜」

「つてもう入つてる!？」

結局行くしかなかったのだつた。

穴の中は明かりも何もなくずつとただの一本道だつた。  
やがて行き止まりに突き当たる

「ほら陽、何もないわよ。帰りましょう」

・・・

返事がない

「・・・陽？」

・・・

自分の声が空しく響くだけ。

「ちよつと冗談じゃないわよ!？」

私は走る。どうせ同じ一本道だから道に迷うなんてことはない  
そして出口が見えてきた。

外へ出る

すっかり雨も止んで青い空と太陽が輝いていた。  
「えつと、」

「ここ・・・何処？」

そこにあつたのは見慣れた竹やぶではなく  
広大な平原だった。

3

「どうなってるのかしら？」

私は当てもなく草原をさまよっていた

先ほど洞穴に戻ろうとしたが私の背後にはもうそれらしいものはなかった。

ほどなくして草原の中に街道が見え始める。

「・・・とりあえず陽を探さないと・・・。」

しかし、あてもなければ手がかりもない。土地勘がないから下手に動けない。

「・・・どうやって・・・？」

考えてもしようがないものはしょうがない

まずはできることからやって行くことにした

「寝床と、食べ物。」

そのためにも街道を使って私は街に出た。

人間の巢は一番安全で食糧確保が容易であることを私は経験で知っていたから。

4

「ヒナタへ早くおいでよ」

洞窟の中で思い切り走ってしまったボクは振り向いてヒナタを待った。

「・・・。」

・・・。

真っ暗で、誰も来る様子はない。

「もう、いじわるなんだからあ・・・。」

そうばやいてボクは元の道を引き返し始めた

光が見えて、洞窟が出る。と

そこにあつたのは黄金の大地だった

よくみると足のしたにあるのは全部砂

「えつと・・・。」

思い出す。たしかニンゲンたちはここをこんな風に呼んでいたはずだ

「・・・さばく・・・？」

5

「・・・困った・・・。」

草原を進んで、荒野を抜けるといつの間にか私は森の中にいた。

「・・・人間の巣どころか・・・ほかの生き物すら見当たらない・・・。」

木になつていた適当な木の実を取って食べる。もう何日も森の中にいるため、このくらいの食糧確保はできるようになっていた

「陽は・・・大丈夫かしら・・・？」

空を見上げた

鳥も雲もない青空が広がっていた。

「陽　　！！！！！」

叫ぶ

そして聞き耳を立ててみた

「　　」

どうやら近くにはいないようだった。

「どこに行っちゃったのかしら・・・？」

6

「・・・暑・・・。」

さばくを歩き始めてもう何時間も経っていた。

太陽はじりじりと照り付け、砂は視界いっぱい広がっていた

水も食べ物もない。

お腹はぐうぐうで喉もカラカラだった

「も・・・ダメ・・・」

へたりこむ僕。本当は倒れ込みたいくらいなのだが熱々の砂の中で倒れ込んだらあつと言う間に干上がってしまうだろう。

「・・・ヒ・・・ナタア・・・」

もう声も出せない

そのときだった

「陽  
!!!!!!!!!!」

ヒナタの声がはつきりと僕の耳に届いた

その声を頼りに、僕は1歩1歩と歩き出す。

7

森が終わり、目の前に大きな砂漠が広がる。

私はそこでもう一度叫んだ

「陽  
!!!!!!!!!!」

耳を澄ます。

何も聞こえなかった

「本当に何処にいるのかしら？もしかしたらもう家に帰っているのかしら？」

都合のいい妄想なのはわかっている　でも　そうあって欲しいと願った。

そのとき

砂漠に一つの小さな影が見えて来た



「・・・陽!!」

ヒナタは走る。

小さな影はゆっくりゆっくりと動いている。  
ふらり、とその影がバランスを崩した。

日向はそっと、それを受け止め、ぎゅっと抱きしめた。

「よかった・・・陽・・・」

そのまま砂漠を出て、森の中に入る。

8

「陽・・・ほら・・・食べ物よ。」

陽は目を閉じたまま微動だにしない。

「・・・ねえ、・・・目を開けてよ・・・陽・・・。」

日向はその果実を自分の口に入れる。

噛み砕いた後、それを陽の口の中に流し込む。

「・・・っ・・・うん・・・。」

「・・・陽。おいしい?」

日向の眼に涙が浮かぶ。

「・・・陽・・・。」

涙が陽の頬を濡らした

「ねえ、眼を覚まして！いつもみたいに、ホラ、飛び込んできなさいよ！！」ヒナタって呼んでよ。ねえ、陽！陽！！」

力の限りに叫ぶ。ほかに何もいないこの世界で、

「なんで．．．なんで眼を開けてくれないの．．．私の言うこと．．．ちゃんと聞きなさいよ．．．。陽．．．。」

天を仰ぐ。陽の体は容赦なく冷えていく。

「私は神なんか信じない。だけど……。今ばかりは私のわがままを聞いて！！　ねえ、陽を返して！！　私の大切な、大切な兎を！！！！」

なんで奪うの！？　こんな小さな命を。運命だから？　そんなの認めない！！　私が覆してやる。運命なんて！！！！！！」

その叫びは透き通るような青い空に吸い込まれていった。

9

夜。体中に落ちる冷たい感覚に眼を覚ました。

ザ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア

「雨……。どこか、屋根のあるところに行かないと……。」

そして、陽を担ぐと私は歩き始めた。

ザ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア

冷たく突き刺さる雨が体力を奪い、足取りを重くする。

陽の体が温かく感じるのはこの腕が雨で冷え切っているせいだろうか……？

そして、私は手近な洞窟を見つけ、その中に入り込んだのだった。

ゴロゴロゴロゴロ……

外では雷がうなっている。

「酷い雨だね。これじゃしばらくここにいろしかなさそうね。」

「……うん……。」

そのときだった。私の傍から声が聞こえたのは。

「……うう……ひなたあ……。」

喘ぎ声で私の名前を、小さな小さな声で、陽は私の名前を呼んだ。

「！ 陽。陽！ここよ。私はここにいろよ！！」

陽が眼を覚ました。私は喜びのあまりにまた、涙を流していた。

「陽……よかった陽……。」

「ひなた……ひなたあ……。」

暖かさを取り戻した陽と私は、その洞窟の中、寄り添いあって眠ったのだった。

10

次に目が覚めたときも、外はものすごい雨だった。

死の淵から戻ってきたばかりの陽は、寒さと空腹で、再びその小さな命を脅かされ始めていた。

「……寒いよ……。ヒナタ……。」

私は、その冷え切った体をぎゅっと抱きしめる。

「……ヒナタ。ごめんね……。」

突然に、ぽつりと陽が言った

「……何が？」

「僕のせいだよ。ヒナタが、こんなことになって、こんなところ

で、ずっと二人だけで・・・。

僕、ヒナタに迷惑かけてばかりで、ヒナタのそばにいても、邪魔なだけで。」

陽はしゃべり続ける。

「僕なんかのために、ヒナタが怪我したり、ヒナタがこんなところに来ちゃったりして・・・。

僕、迷惑だよね・・・。居ない方が・・・いいよね。僕なんか・・・。」 陽がそっと私の腕から離れる。

「さよなら・・・。ヒナタ。」

陽は、まだ雨の降りしきる外に走って行くとする。

「まちなさいっ！！陽。」

その手をつかむ。

「迷惑よ、ええ迷惑ですとも！！そうやって勝手に考え込んで、勝手に結論出して、勝手に行動するところなんか特にね！！。」

もう一度、陽を強く抱きしめる。

「本当に、いつもろくでもないことしかないし、いつも危険を顧みないし、反省を知らないし。」

寂しがり屋のくせに、好奇心だけは一人前で、結局私が居ないと何にもできないくせに・・・。」

陽は私の腕の中でうずくまっていた。

「私が居ないと何にもできない仔兎のくせに、何が迷惑よ？何が居ない方がいい、よ！？」

私はあなたを一度たりとも居なくてもいいなんて思ったことはない。私は、・・・。」 うずくまっている陽から嗚咽が漏れる。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい。」

小さな声で、陽が謝り始める。

「いいのよ、私の可愛い仔兎。あなたはまだ、何も考えなくても、何も知らなくてもいい。」

あなたはまだ、甘えていい年頃なんだから。

迷惑なんてこと、あるものか・・・ただ、あんまり心配かけさせな

いで・・・。」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・。」  
陽は謝り続ける。

1 1

また、夜が更けて、明けた。

雨は今日も降り続けている。

「陽・・・まだ大丈夫？」

「・・・うん・・・なんとか。」

陽は既にかなり衰弱していた。今夜くらいが峠なんじゃないかくらいに。

そのときだった。

ザザザ・・・ガラガラガラガラ

！！！！

突然、洞窟が闇に包まれた。

「土砂崩れ・・・？」

連日の雨で地盤が緩くなっていたのであろう。

「どうしよう。他に出入り口があるかどうか・・・。」

私は洞窟の奥に目を向ける。

洞窟の奥・・・か・・・。

「行くわよ、陽。」

私は衰弱した陽を抱き上げる。

「行くって・・・どこに？」

「私たちの竹林に帰るのよ。」

私は歩き始める。

なんとなくだけど、確信があった。こっちに行けば、多分

帰れる

光が見える。

その先に見えるのは、快晴の明るさ。  
洞窟を抜けると、そこは

見慣れた竹林。

見上げれば、雲一つ無い空と、笹の葉の木陰。

そう、私たちは

帰ってきた。

12

そのあと、いろいろあったけれど。とりあえず、今は日常を取り戻しつつある。

気がつけば、あれから何年も経過していた。

私は相変わらず、墓蔭でも敷いて、一人月を見ている。

最近もの寂しく感じるようになったのは、やっぱり

「こう、騒がしい奴がいなかったのは、やっぱり」

つぶやいてみた。つぶやいたところで何が変わるわけでもない。

そして、私はまた月を見上げ、あの頃の出来事に、思いをはせていた

・・・

「隣、いいかな？日向。」

いいかな？とかいいながら既に隣に座っているそいつ。

「許可した覚え、無いけど？」

「僕は日向に断られた試しがないんでね。」

そいつは憎らしい笑みを浮かべる。

「ふん。断つても、無駄だろうから断らないだけよ。」

「さすが、日向。よくわかってる。」

私は顔を赤くし、しばらく沈黙が流れる。

「それにしても、あんたはいつの間にか私を追い越したのよ?」

「?何のこと?」

そいつは本気で首をかしげてる。

「背丈よ背丈。なんであんたはそんなに大きくなれるわけ?」

すると、またそいつは笑いながら、

「僕が雄だから、かな。それと、僕ももう仔兎じゃないって証拠でもある。」

「まったく、まだまだあんたなんか未熟なのよ。」

「なら、未熟の間は面倒見てもらおうかな、日向。」

やれやれ、私は昔から、この仔に口で勝てない。まあ、昔は涙目とかわわれていたけれど、今は口がうまくなって本当に口では勝ち目がないのだ。

「し、しょうがないわね……。一人前になるまでだからね……。」

「

別に一生でも、僕は構わないよ。」

そんなことをほざいてこいつは笑っていた。

「一生なんてお断りよ。」

ぷい、と顔を背ける。こんな火照った顔をいつまでも見られたくはないからだ。

「日向。好きだよ。」

突然そんなことを言われる。

「やだ。昔みたいに呼んで。」

昔甘えさせてた分、今は甘える側に回ってみる。

「しょうがないなあ、じゃあ。」

「ヒナタ。好きだよ。」

あの頃のような無邪気な笑み

私の顔はきつと真っ赤だ。でも、はっきりと声にする

「私もだよ、陽。」

「私も、陽のことが好き。」

そして、月夜は更けていった。



## 2・十月の二十三夜 雨のち曇りの大冒険！？（後書き）

陽が大人になるという自分でも予想していない（おい）最後になつてしまい、連載続くの？コレ。という状態です。てか最終話です（おい）

最後はラヴラヴで書いてて恥ずかしい（マテ）という状態でした。実は大人陽を主人公に別連載で書きたいなーと画策してますがまだネタが思いつかないのでしばしお待ちをw  
最後まで読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3605d/>

---

白兔の憂鬱

2010年10月9日16時26分発行